

## 週刊 座、グレート・リーダーズ通信

## 『インド私録-思い切り取り組んだこの50年-』No.13

## 今週のキーワード! 生け花

## インドで根付いた花への愛

インディラ・ガンディー首相が生け花を愛していたことは、『インド私録』の中で1983年に訪印した勅使河原宏氏のインド商工会議所連盟(FICCI)での草月流のデモンストレーションに駆けつけたエピソードで紹介されています。本にはあっさり書かれています。この時のインディラ・ガンディーは車で乗り付けるなり、玄関で待ち受ける武藤氏との挨拶もそこそこに建物の中に駆け込んだといいます。通路を突っ走り、階段を駆け上がり、それに伴走した武藤氏は、そこには権力政治家の姿はなく、生け花をこよなく愛する一人の女性でしかなかった、その姿を見たがゆえに、政治家としての評価とは別に「花も実もある一人の女性」としてのインディラ・ガンディーが思い出されると語ります。

インドの生け花は、1960年代に夫の仕事で訪れた日系アメリカ人女性が草月流をインド女性たちに教えたことに始まります。1966年1月には熱心な教え子たちにより1956年創設の国際的な文化団体、いけばなインターナショナル(本部東京。 <http://www.ikebanahq.org>)に加盟し、その翌月には早くも第1

回年次花展を開催。デリー支部のサイトによれば、その時のテーマは「ジャワハルラール・ネルーの生涯」。開会式はインディラ・ガンディーが務めており、彼女はその後も主要な国家的イベントでの展示を後押しするなど、生け花活動に熱心に取り組みました。

## 名前の豆知識

## その1 ガンディー

インディラ・ガンディーとインド独立の父といわれるマハトマ・ガンディー、同じガンディー姓であるために、誤解されがちですが、インディラ・ガンディーのガンディーは夫であるフェローズ・ガンディーの姓であり、フェローズ・ガンディーは拝火教徒ですので、ヒンドゥー教徒の商人階級出身のマハトマ・ガンディーとは血縁関係はありません。

なお、この結婚は父のジャワハルラール・ネルーが望まなかったもので、1942年、当時イギリスで反英運動をしており、後にネルー政権で外相を務めたクリシュナ・メノンが仲立ちをしました。

## 名前の豆知識

## その2 パンディット

インドでは人名の前によく「パンディット」を配することがあり

ます。ジャワハルラール・ネルーはパンディット・ネルーなどと言われます。このパンディットとは、学者や学識のある人という意味であり、「あの人はパンディットだ」という言い方がされます。また、ブラーマンの尊称としても使われます。ですから、パンディット・ネルーといった場合、尊敬の意味が込められているわけです。

また、パンディットという姓もあります。ネルーの妹はパンディット家に嫁ぎ、パンディット姓を名乗っていました。

## 『インディラ・ガンディーの手紙

## 1950~1984』

『インド私録』で紹介されているドロシー・ノーマン著“INDIRA GANDHI: LETTERS TO AN AMERICAN FRIEND, 1950 - 1984”は、1988年に朝日新聞出版から邦訳『インディラ・ガンディーの手紙 1950~1984』(朝長梨枝子翻訳)が出ており、日本語でも読むことができます。父ネルーの傍でホステス役を務めた1950年代から凶弾に倒れる1984年まで、著者に書き送った手紙140通を紹介しています。

第15回放送は  
9月7日です。

